

## 明治時代の東京を撮影した日本初の空中写真に関する研究

内藤健志

指導教員 清水英範 教授

### 1. 研究の背景と目的

古写真蒐集家として著名な石黒敬章氏のコレクションの中に、明治時代の東京を撮影した4枚1組のパノラマ空中写真がある。当時の写真としては大変鮮明なもので、石黒氏の著作<sup>1)</sup>に紹介されているほか、東京・東新橋にある共同通信社本社1階のロビーに解説が付され展示されている。

また、鮮明さは劣るが、同じ写真が明治44年刊行の写真集「東京風景」<sup>2)</sup>に掲載されており、国立国会図書館の近代デジタルライブラリーを通して閲覧することができる。現段階において、石黒氏の写真の掲載許可を得ていないので、ここでは「東京風景」掲載のものを紹介する(図1)。



図1 「東京風景」に掲載されたパノラマ写真

連続する4枚の写真の左右2枚ずつがつながり合わせられ、上下に並べられている。上の写真には、浜離宮や新橋駅、建設中の高架鉄道などが、下の写真には日比谷公園、建設中の霞ヶ関の官庁街や丸の内のビジネス街の姿を見てとれる。

本写真は、現存する中で日本初の空中写真と考えられる点、市区改正事業の進む東京の広範囲を撮影している点から、史料価値の高い写真であるが、これまであまり知られておらず、東京の歴史に関わる文献にもほとんど紹介されていない。

一方、石黒氏はその著作の中で、本写真は海軍技

師・市岡太次郎が撮影したものであろうと考察し、また、写真にある建物の建築時期から、撮影された時期は明治37年であると推定しているが、市岡太次郎なる人物の詳細や、撮影の経緯などについては、未だ分かっていないことが多い。

本研究は、本写真の所在や史料的価値の高さを多くの人々に知ってほしいという思いから、写真の撮影者、撮影経緯などを多方面から調査し、その歴史的な位置づけをより明確にすることを目的とする。

特に人事・軍事資料、当時の雑誌や新聞に本写真と関連する記事・記述がないか調べた。

### 2. 撮影者と撮影経緯

人事資料から「市岡太次郎」なる名前の人物に日本軍の関係者であるとともに写真家としての側面をもった人物がいることが分かった。市岡は帝国大学理科大学化学科を卒業、化学の教科書「新編化学」<sup>3)</sup>を執筆し、写真雑誌に寄稿し、写真乾板の国産化に尽力した。また明治25年に海軍大学校の教授に就任し海軍の高等文官となり、明治31年海軍技師に転任、火薬の研究を行い、明治37年の日露戦争では海軍技師として旅順で気球を使って偵察していたことが分かった<sup>4) 5) 6)</sup>。日露戦争の戦場写真も出版していた<sup>7)</sup>。さらに特許第6469号の明細書に書かれた住所と、彼の発行した本<sup>8)</sup>に記載された住所から、戦前の秘密特許第1号とされる無煙火薬製造法の発明者でもあることが判明した。海軍技師市岡太次郎は以上の背景をもつ人物であると分かった。

市岡が本写真を撮影したならば日露戦争の作戦中に撮影されたと考え、日露戦争中の海軍の関係書類を防衛研究所で調べた。

気球の部隊は陸軍、海軍ともに存在した。陸軍は臨時気球隊、海軍は軽気球隊を名乗っていた。海軍の軽気球隊に関して、海軍内でのみ流通していた「極秘明治三十七八年海戦史」(明治43年ころ)<sup>9)</sup>では海軍軽気球隊についての項があり、その活動内容が分

かった。なお上記極秘日露戦史を編集し、一般向けに出版された「明治三十七八年海戦史」<sup>10)</sup>では海軍軽気球隊に関する記述は存在しなかった。

「極秘明治三十七八年海戦史」によると、明治37年6月気球が日本に到着、6月29日から7月7日まで試験を行い、海軍軽気球隊が結成され、7月31日には旅順近郊に出征し、戦場に配備されるも失敗、9月には解散した、とあり、市岡が気球試験の委員に任命され、旅順では実際に気球に搭乗し、偵察しようとしたことも書かれていた。

気球試験をした時期に発行された新聞を調べると7月2日、7日に築地の海軍大学校で気球の試験を行ったという記事が、試験の翌日にそれぞれ掲載されており<sup>11)12)</sup>、本写真が築地の海軍大学校から揚げたものだと分かった。

7月初めの気球試験の結果が「極秘明治三十七八年海戦史」に掲載されており、ここでは写真に関連することは一切触れられていないが、気球部隊の改善点について、軽い望遠写真機を用意するのがよい、と気球隊が解散した後、市岡は提出している。以上から、偵察目的で本写真が撮影されたという推測が、より裏付けられた。

なお、海軍や陸軍が日露戦争に関連して気球から撮影した写真は、戦争終了後に艦隊の凱旋式で撮影された写真が1点みつかっただけで、それ以外にはこの4枚を含めても防衛研究所図書館でみつけることはできなかった。

### 3. 新史料「実業之日本」付録写真について

本写真が掲載された明治時代の雑誌を発見した。明治42年1月1日号の「実業之日本」付録<sup>13)</sup>に本写真が4枚つなげられてパノラマ状に掲載されていた。石黒氏所有の写真にある綱は消され、修正の跡が残っていた。写真には説明がつけられており、理学士市岡太次郎海軍技師が、軍用空中写真の試験として、築地の海軍大学校から揚げたものと記述があり、海軍の資料や新聞から推定したものと一致した。また、新しい情報として、高度700 feetから撮影したものであること、初めて一般に公開されたことが書かれていた。高度については単写真標定を行った結果、190mから200m程度とわかり、付録につけられた説明の高度とほぼ一致した。

「実業之日本」本号は「時事新報」「東京朝日新聞」などの新聞で、1面または最終面に大々的な広告が

打たれていること、後藤新平などの著名な人物が寄稿していると宣伝していることから、本写真の存在は「実業之日本」本号を通じて多くの人々に知られることになったと思われる。

### 4. 「東京風景」の掲載写真に関する謎

小川一真出版部刊の「東京風景」(明治44年)では"飛行器(aeroplane)"より撮影したと添えられ、誤った情報が書かれている。また、「実業之日本」の写真と同じように気球から垂れ下がる綱が消されており加工されている。

明治40年には既に小川一真と市岡太次郎は親交があった<sup>14)</sup>。このため小川が本写真について正しい情報に接していた可能性が高い。また、広く本写真が知られることとなった「実業之日本」より2年も遅く出版され、当時既に本写真の撮影経緯は一般に知られていた。それではなぜわざわざ誤った情報が載せられたのだろうか。これは大きな謎である。

### 5. 今後の課題

今後の課題としては、「東京風景」の誤りの理由の解明と海軍で撮影された写真がなぜ一般に出回ったのかという疑問点の解明がある。海軍が流出させた意図、明治の2誌が写真を手に入れ掲載した意図は何か、これにより本研究で分かった撮影経緯のほか、当時の本写真に対する認識が明らかにできるのではないかと考えている。

### 参考文献

- <sup>1)</sup>石黒敬章：明治・大正・昭和東京写真大集成,新潮社,2001
- <sup>2)</sup>石黒敬章：ビックリ東京変遷案内,平凡社,2003
- <sup>3)</sup>東京風景,小川一真出版部,1911
- <sup>4)</sup>市岡太次郎：新編化学,内田老鶴圃,1891
- <sup>5)</sup>高瀬慎吾：新平塚風土記稿,平塚市教育委員会,1970
- <sup>6)</sup>東京都写真美術館：日本写真家事典,淡交社,2000
- <sup>7)</sup>市岡太次郎：日露戦役海軍写真帖,小川一真出版部,1905
- <sup>8)</sup>市岡太次郎：大鎧着初式 併諸家所蔵大鎧之図,山田芸艸堂,1910
- <sup>9)</sup>海軍軍令部：極秘 明治三十七八年海戦史 巻9
- <sup>10)</sup>海軍軍令部：明治三十七八年海戦史,春陽堂,1909-1910
- <sup>11)</sup>讀賣新聞,明治37年7月3日7面
- <sup>12)</sup>讀賣新聞,明治37年7月8日5面
- <sup>13)</sup>軽気球より撮影したる我帝都東京市の大写真,1909年1月1日号,実業之日本,付録
- <sup>14)</sup>小沢清：写真界の先覚小川一真の生涯,近代文芸社,1994